

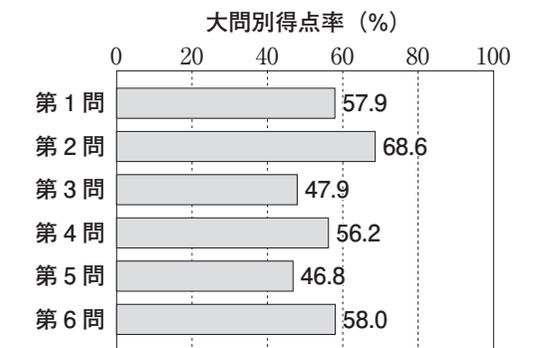
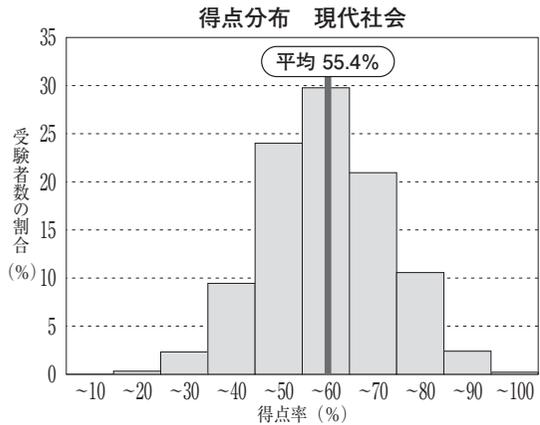
現代社会

ここまでの準備をベースに、本番を視野に入れた対策の徹底を。

I. 全体講評

今回の「全国統一高校生テスト 現代社会」の平均点は **55.4** 点。前回 8 月の模試から 10 点近く上昇した。多くの受験者はセンター試験本番の平均点レベルである 60 点台に近づいており、本番へ向けての準備が進んでいることを示す結果となっている。

受験者にとっては、現在までの準備が間違いではないことを証明する結果ともいえるが、本番レベルに対応できるようになるためには、さらに苦手な分野・事項への対策を見直していくが必要であることが示された結果となっている。



II. 大問別分析

第 1 問 国会・内閣

学習時にスルーしている事項の確認を。

受験学年の得点率は 57.9%。国内政治分野として頻出である国会・内閣を中心に幅広く出題した大問であったが、得点率はこの模試の平均得点率を上回った。相当数が一度は学習した分野について、対応ができつつあることを示す結果となっている。

その中で、イギリスの政治について問うた問 2 [2] が 35.5% の正答率と低かった。A を正文とした受験者が計 4 割以上いるが、イギリスがアメリカと異なり議院内閣制であることを知っていれば回避できた。アメリカ以外の主要国の政治制度は学習時にスルーしがちであるが、国際政治分野での時事事項（イギリスでは、EU 離脱など）と絡めた出題が想定されるなど「現代社会」では重要な頻出事項となる。一度同分野を学習して正解できなかった受験者は、確認から再度徹底しよう。

第 2 問 南北問題

日本の ODA について確認を。

受験学年の得点率は 68.6%。高校生の多くが苦手とする時事的要素も含んだ国際経済分野中心の出題だが、この模試中最も得点率の高い大問となった。受験者の多くが本番への対策を進めつつあることを証明する結果となっている。

その中で、日本の ODA について尋ねた問 3 [11] では、②が 30% 近くの受験者に選択されており、この大問で最も低い正答率であった。ここで差をつけられないように、日本の ODA についての確認を徹底しよう。

第 3 問 戦後の国際政治

設問文を読んで選択肢を吟味しよう。

受験学年の得点率は 47.9%。国際政治分野の理論的事項中心の出題の大問であり、この模試で 2 番目に得点率の低い大問となった。受験者の相当数が学習を進めてはいるものの、まだ苦手な分野があることが証明されている。

特に歴史的事項を苦手としている受験者がとまどう設問内容であった問5 [18]の正答率は6.9%と、この模試中最も正答率の低い設問となった。選択肢を読んでどれもすべて正しいためどれを選んだらよいか分からなくなった受験者が多数出たことが想定されるが、ここは設問文中の「冷戦終結後に表面化した」をきちっと把握できていたかどうかで正解にたどりつけたかどうかの差が出たといえる。

第4問 少子高齢社会

租税や財政に関する用語の確認の徹底を。

受験学年の得点率は56.2%。現代社会での重要問題として、多くの受験者に問題意識があったと想定される分野からの出題が中心の大問であったが、この模試での平均正答率を超える得点率の大問であった。同分野に関しては問題意識が一定の学習成果に結びついている受験者が多いことを立証する結果である。その中で、問2 [23]の正答率が3割台となっている。租税の仕組みについての出題であったが、**水平的公平と垂直的公平の違い**についてのAを正文とした受験者が半数近くになり、この大問中最も正答率の低い設問となっている。相当数の受験者が、租税に関する基礎的用語の理解が定着していないことが明白となっている。

第5問 農業、消費者問題

国際的貿易体制についての学習の徹底を。

受験学年の得点率は46.8%。農業をベースにして、消費者問題や国際経済も含めた内容であったが、この模試中最も得点率の低い大問となった。この分野においてまだ準備不足の受験者が多いことを示す結果となっている。

その中でも自由貿易協定について問うた問3 [29]が20.1%という正答率となっている。EPAとFTAの違いを知っていれば正答である②を選べる設問だったが、①・③を選ぶ受験者が正答率を超えていた。多くの受験者に正確な知識がまだなかったことを示している。

第6問 科学技術と生命

倫理的分野を様々な観点から復習しておこう。

受験学年の得点率は58.0%。「現代社会」的な切り口からの出題であったが、この模試の平均得点率を超えるレベルの得点率の大問となった。

その中でも倫理的分野からの出題であった問5 [36]が27.2%の正答率となっており、この大問中最も低かった。「現代の倫理的課題」という観点からの出題であったが、「現代社会」では重要な問題点であるとともに、**ロールズの「公平としての正義」**は頻出である。倫理的事項に関して、復習する際にはただ記憶するだけでなく、様々な視点からの理解ができるようにしておこう。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆本番を視野に入れた解答や記憶の徹底を。

今回の模試の結果からは、本番まであと3か月弱という状況で、一定の学習は完了しているものの、本番レベルの知識とし切れていない受験者が相当数存在することが、当然ではあるが推測される。

「現代社会」はさっと学習して知識をおおざっぱに入れば得点が稼げる科目ではないことは、今回の結果からも示されている。特に受験者にとってよくニュースで接する事項を取り上げた分野である**第4問の問2 [23]**の出題傾向でも明白だが、特定の事項について正確に理解していなければ正解にたどりつけない出題が必ず混ざってくる以上、教科として正確な理解を重ねていくことで対応するしかない。学習しきれていない分野は早急にテキストなどで学習するとともに、1回学習した分野やニュースで知った時事などもセンター試験本番で活用できる知識とするために、多方面から理解していくスタンスで、体系的に再確認する努力をしてみよう。そうすれば今回の**第2問の問3 [11]**で見られた、「事項理解が不完全なため、設問文を読み取りきれずに正解にたどりつけない」という解答行動を防げる。

◆次回の模試に向けて。

センター試験の場合には、特に努力の成果がはっきりと出やすい。そしてまんべんなく出題されるため、多くの分野に対応できる力を養成する必要がある。また**第1問の問4 [4]**のような近年のセンター試験独特の出題形式にも慣れる必要がある。受験者には、自分が間違えた分野の復習は当然として、少なくとも「各国の政治体制」、「冷戦後の国際社会」、「租税と財政」、「自由貿易と経済協定」については、次の模試までに再確認を行い、得意分野にする努力が求められる。